

T O K Y O 発

いにしえの騎馬隊

源義仲ゆかりの埼玉・嵐山町

小ぶりな在来馬(和駒)に乗り、弓での射抜く。サラブレッドでの行事を見慣れた自己には何ともかわいらしく映るが、これこそが、古式にのっとった本来の流鏑馬の姿という。源平時代、強力な騎兵戦術で恐れられた坂東武者ゆかりの地・埼玉県嵐山町で鍛錬が続く。



鹿島神宮で行われた奉納流鏑馬に参加する森さん(後)と騎馬会提供、林佳夫氏撮影



晴れ渡った日曜日、嵐山町の都幾川河川敷に、弁護士、教師、会社員、中高生と、肩書も年齢も多様な男女十人が集まった。東京・六本木に事務局を置く「倭式騎馬会」の会員たちだ。

全国でも百数十頭しかないという木曾馬や、道産子など七頭がいる。どれも、肩までの体高は二三〇センチほど。サラブレッドより三十一センチも低い。在来馬と知らなければ、子馬と間違えてしまいたい。

最初はゆっくり、次第に速く。そろって七十センチほどの走路を何度も往復し、最後に速足での射を射る。メンバー最年少で中学二年生の石井百花さんは「在来馬はおとなしくて、かわいい」。もともと乗馬を習っていたが落馬して怖くなりやめた体験がある。春先に会の活動を知り「これなら怖くない」と、入門した。会長の森さん(後)は、フアッシュコンテイナー森英恵さんの長男。ビジネスで世界中を飛び回るなか、「日本人のアイデンティティー」として「武道の美学」について考えるようになった。それで、古流剣術や居合の仲間たちと十年前に会を結成した。

小型で軽快 在来馬



新緑の中で乗馬訓練をする倭式騎馬会のメンバー

嵐山町は、平安治世へのろしを上げた源(木曾)義仲の生誕地とされ、河川敷の対岸には源平合戦で活躍した嵐山重忠の居館跡と言い伝えられる「菅谷館跡」もある。森さん

の「あこがれの地」だったと言う。平安時代に始まった流鏑馬は、全国各地で復活の取り組みが進み観光の目玉となっている。多くは競走馬を引退したサラブレッドなどの西洋馬が使われているが、森さんは騎乗する馬も伝統にこだわった。七頭の在来馬は、「馬役奉行」の光前裕さん(後)が主宰する東松山市の牧場で飼育している。

みっちり六時間の練習を終え、装具を外された馬たちは都幾川で水浴びしていた。前脚で水を跳ね上げ、岸に上がると犬のようにゴロンと背中から転がり、ぱっと立ち上がる。軽快な身のこなしは「サラブレッドにはできない芸当」と、メンバーは口をそろえる。

これまで、鹿島神宮(茨城県)、出雲大社(鳥根県)、城南宮(京都市)など各地の奉納流鏑馬で活躍してきた。二〇〇五年には、嵐山町の鎌形八幡神社で、義仲の父・源義賢の遺臣七家が正時代まで続いていた流鏑馬を復活させた。

森さんは「流派にとらわれず、弓馬術を研究し、和駒を復興したい」と語る。



流鏑馬の稽古。和駒に乗っての射を射る